

Title	表記法6 授業報告：中級レベルの漢字学習科目における履修者アンケートとその検討
Sub Title	
Author	石野, 由梨子(Ishino, Yuriko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2023
Jtitle	日本語と日本語教育 No.51 (2023. 3) ,p.137- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告3
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20230300-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

表記法6 授業報告

一中級レベルの漢字学習科目における 履修者アンケートとその検討―

石 野 由 梨 子

1. はじめに

本稿は、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター日本語研修課程（以下、JLP）において2022年度秋学期に開講された「表記法6」の授業内容について報告するものである。また、本稿の後半では、「表記法6」での学習において各レベルの学生たちがどのような点に困難を感じているのか、履修者に対して行ったアンケート調査の結果について報告する。

2. 「表記法6」授業概要

2.1 概要

慶應義塾大学JLPの開講科目は、総合的に日本語を学習する総合科目と特定の技能を伸ばすことを目的とした技能別科目に分かれ、表記法は主に漢字学習を目的とした技能別科目の一つである。表記法は、中級前半の学習者を対象とした「表記法5」と中級後半の学習者を対象とした「表記法6」とに分かれ、筆者が担当したのは後者の「表記法6」である。

2.2 学習目標と使用教材

「表記法6」での学習目標は、中級後半の漢字を習得し、漢字の読み方・書き方だけでなくその漢字を正しく適切に使用できるようになることである。教材は、『留学生のための漢字の教科書中級700 [改訂版]』（佐藤尚

子・佐々木仁子著（国書刊行会）を使用し、一学期間に13課から25課までの漢字、計292字（1課あたり20～24字）を扱った。

2.3 履修者

2022年度秋学期の履修者は計15名であり、オンラインで開講された22年度春学期の10名からはやや増加した。「表記法6」は基本的に中級後半にあたる学習段階6（以下6レベル）の学生を対象とした科目であるが、JLPの技能別科目では、対象となる学習段階に加え、隣接する学習段階の学生も履修が可能となるため、「表記法6」は学習段階5（以下5レベル）と学習段階7（以下7レベル）の学生も履修が可能となっている。5レベルと6レベルはさらにAとBの2つのレベルに分かれているため、実質的には5つのレベルに分けられる。レベル別の履修者数の内訳は表1の通りである。漢字学習では、漢字圏の学生であるか非漢字圏の学生であるかによって学習への取り組み方が大きく異なるため、漢字圏の学生数を人数の隣に（ ）で示した。

表1 22年度秋学期「表記法6」履修者のレベル別人数

学習段階	人数（うち漢字圏の学生数）
5A	4
5B	4(1)
6A	5(3)
6B	1
7	1(1)
合計	15(5)

表1に示したように、22年度秋学期は、履修者の半数以上が5レベルの学生であり、その大半が非漢字圏の学生であった。そのため、学期の開

始段階では、学生が学習のペースについて来られるのかという点で懸念があった。なお、22年度春学期の一つ下のレベルにあたる「表記法5」を履修していた学生は15名中1名のみであった。

3. 授業の進め方

3.1 予習

授業では、1コマ90分の中で20字～24字の漢字を扱うため、各漢字の書き方を指導する時間までは取れない。そこで、初回ガイダンスにおいて、授業では書き方の練習を行わないことを伝え、①授業前に各課の学習漢字を使用した読み物が掲載されている扉のページを読み、学習課の漢字に目を通しておくこと、②各課の学習漢字の中で、初めて勉強する漢字については書き方を練習しておくこと、の2点を予習として課した。中級後半の学習者を対象とした科目であり、履修者は既にある程度の漢字学習の経験を積んでいるため、この点については特に問題はないと思われる。もちろん、書き方において間違いやすい部分など気を付けるべき点については、適宜授業で扱い注意を促した。

3.2 授業の流れ

授業では、最初に前の週に扱った課の小テストを行った。小テストは、教科書に掲載されている学習漢字を使用した例文「よみましょう」「かきましょう」の文をそのまま使用し、漢字の読み方と書き方を問う問題に加え、主に動詞について、当該漢字語彙と一緒に使うべき助詞を問う問題を、それぞれ5問ずつ入れた。これは、単に漢字の読み書きができるようになるというだけでなく、漢字を適切に使用するという授業の目的を学生に意識してもらうためである。実際、学期開始時には、漢字の読み書きは正しくとも助詞は不正確という学生が多かったが、徐々に助詞問題の正答率も上がり、漢字語彙の使い方にも意識が向くようになってきたと感じた。

小テストに続き、フラッシュカードを用いて簡単に前回の学習漢字の復

習を行った後で、その週の学習課に入った。教科書では、各漢字につき2～4個程度の漢字語彙が紹介されているが、そのすべてを扱うのは時間的にも厳しく、使用頻度の低いものも含まれているため、使い方に注意が必要なものや混同しやすい類語があるものなど、重要度の高いものを優先的に扱い、解説した。また、関連する語彙を紹介するなど、学生が自然に語彙を増やせるよう心掛けた。学生からは積極的に質問が出て、普段の学習の中で生じる疑問点を解消する場にもなったと感じている。語彙を一通り学習した後、学習漢字の語彙を使用した例文「よみましょう」「かきみましょう」を読み、語彙解説の際に説明した注意点を再度確認した。「かきみましょう」の文はひらがなであるため、「よみましょう」「かきみましょう」の文をリライトしたものを用意し、授業ではそのプリントを使用した。

3.3 宿題

3.1節で述べた通り、小テストで「よみましょう」「かきみましょう」の例文をそのまま出題することから、「よみましょう」「かきみましょう」の文をすべて書き写して振り仮名をふり、更に授業で使用したプリントを使用して自分で答えをチェックすることまでを宿題とした。その際、教科書の文は丁寧体の文と普通体の文が混在しているため、会話の文以外は普通体に変えて書くこととした。敬語や終助詞の使用など、会話の文の特徴については初回の授業で説明したが、文体を適切に直せる学生とそうでない学生とに分かれた。また、宿題には例文を書き写すことのほかに、授業で使い方解説した語彙のうち、特に重要なもの3つ程度を指定して文作成を課した。文作成の際、同じ課の漢字を1つ以上、文中で使用するという制限を設けたところ、学生はそれぞれ工夫して課題を行っていた。

3.4 定期試験

定期試験では、毎週の小テストと同形式の問題に加え、文中に空欄を設け、選択肢の中から適当な語彙を選んで漢字に直して埋める問題や、宿題と同形式の短文作成問題などを出題した。出題範囲は、中間試験が13課

から 18 課までの 6 課分（計 124 字）、期末試験が 19 課から 25 課までの 7 課分（計 168 字）であり、比較的広範囲からの出題となったため、学生にとっては準備が大変だったのではないかと思われる。

4. 授業運営上の懸念と疑問点

2.3 節で述べた通り、本科目では、半数以上が 5 レベルの学生であり、学生の大半が非漢字圏の学生であった。そのため、学生が毎週 20 字以上の漢字を消化しきれぬのかという点に加え、例文として提示される「よみましょう」「かきみましょう」の文の理解に支障がないのかという点が懸念として生じた。例えば、教科書には下記のような例文がある。

- ① 赤ちゃんが生まれた人に何をお祝いにあげればいいですか。
(15 課よみましょう/p.115)
- ② 収入よりも支出が多いと赤字になるわけです。
(17 課かきみましょう/p.129)
- ③ そんな言葉は目上の人に対して使えません。
(22 課かきみましょう/p.157)

慶應義塾大学 JLP の中級前半レベルで使用されている『中級日本語(上)』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編著）では、①は第 6 課、②は第 9 課、③は第 8 課の学習項目である。学生によっては未習であることも考えられ、初級を終えたばかりの 5 レベルの学生にとっては漢字学習に加え、例文の理解も負担になりそうに思えたが、小テストの成績はレベルに関係なく好成績の学生が多かった。そのことから、学生がひとまず漢字の読み書きのみを覚えているのか、あるいは教科書の例文をきちんと理解した上で語彙を習得しているのか、という点に興味を覚えた。そこで、学生に簡単なアンケートを取り、表記法 6 での学習内容についてどの

ように感じているか、学生の受け止め方を調べてみることにした。

5. アンケート

5.1 アンケートの内容と回答方法

アンケートは全14回の授業の第10回目に実施し、当日欠席した1名を除き、15名中14名から回答を得た。アンケートにはレベルと漢字圏の学生であるか否かのみを記入してもらい、匿名で行った。質問内容は、「A. 教科書に関する質問」と「B. 授業に関する質問」の大きく2つに分けた。

まず、「A. 教科書に関する質問」は、教科書1課あたりの学習量について問うもので、内容は下記の通りである。なお、1課あたりの学習漢字は20～24個で、「よみましょう」「かきましょう」の例文は、各15、6文程度の計30～32文である。

質問 A-1. 1つの課の漢字の中で初めて習う漢字はどのくらいありますか。

質問 A-2. 1つの課の「よみましょう」「かきましょう」の文の中で、知らない言葉はどのくらいありますか。

質問 A-3. 1つの課の「よみましょう」「かきましょう」の文の中で、知らない文法はどのくらいありますか。

質問 A-4. 1つの課の「よみましょう」「かきましょう」の文の中で、意味がわからない文はどのくらいありますか。

回答の際は、各質問について、①ほとんどない、②2、3個、③4～8個ぐらい、④半分ぐらい、⑤半分以上、の5つの選択肢の中から選んでもらった。

次に、「B. 授業に関する質問」は、さらに、「B-1. 授業で大変に感じること」と「B-2. 授業での目的」に分けた。「B-1. 授業で大変に感じるこ

と」については、以下の5項目について「全く大変ではない」から「とても大変だ」までの5つの選択肢の中から選んでもらった。

- ① 新しい漢字の書き方を覚えること
- ② 新しいことばを覚えること
- ③ 「よみましょう」「かきましょう」の文を読むこと
- ④ 助詞など、ことばの使い方を覚えること

この質問は、授業では学習漢字とその漢字を使用した学習語彙が多いため、学生にとって新たに漢字や語彙を覚えることが負担となっているのか、漢字や語彙学習は負担ではないが、使用面で難しさを感じているのかという点について知るために入れたものである。

「B-2. 授業での目的」については、①新しい漢字を習う、②語彙を増やす、③既習の漢字を復習する、④その他、から複数回答を可として選択してもらった。学生にとっての授業の位置づけは、学生の習熟度によって異なることが考えられるため、ここまでの回答を踏まえううえで、学生が何を主な目的として授業に臨んでいるのかを知るためにこの質問を設定した。

5.2 アンケートの結果

5.2.1 「A. 教科書に関する質問」の結果

まず、「質問 A-1. 1つの課の漢字の中で初めて習う漢字はどのぐらいありますか。」の結果は表2に示すとおりである。なお、表中の()は、漢字圏の学生数である。

学期開始当初、1回分の学習漢字数(20～24個)が学生の負担になるのではと心配していたが、多くの学生にとって初めて習う漢字は2、3個以下であり、漢字数はあまり負担になっていないことがわかった。また、漢字圏の学生であるか否かという点で大きく差があるとは言えず、非漢字圏

表2 質問 A-1. 回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
①ほとんどない	1	—	1 (1)	1	—	3 (1)
② 2, 3 個	2	2 (1)	3 (2)	—	1 (1)	8 (4)
③ 4~8 個	—	1	—	—	—	1
④半分ぐらい	1	1	—	—	—	2
⑤半分以上	—	—	—	—	—	0

の学生も、漢字数についてはあまり負担に感じていない学生が多いことが分かった。5 レベルでは③④を選んだ学生がいるのに対し、6 レベル以上の学生ではないため、5 レベルの非漢字圏の学生の中には、学習漢字数を負担に感じている可能性のある学生が数名いることがわかった。

次に、「質問 A-2. 1 つの課の「よみましょう」「かきましょう」の文の中で、知らない言葉はどのぐらいありますか。」の回答は表3 の通りである。

表3 質問 A-2. 回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
①ほとんどない	—	—	—	1	—	1
② 2, 3 個	3	2 (1)	3 (2)	—	1 (1)	9 (4)
③ 4~8 個	1	1	—	—	—	2
④半分ぐらい	—	1	1 (1)	—	—	2 (1)
⑤半分以上	—	—	—	—	—	0

質問 A-2. は、例文中に知らない語彙があるかについての質問であるが、質問 A-1. と同様、語彙についてもあまり負担にはなっていないようである。多くの学生は、一課分の例文 30 程度の中いくつか知らない語彙が

あるという程度で、そのような語彙を重点的に覚えていたと考えられる。

続いて、「質問 A-3. 1つの課の「よみましょう」「かきましょう」の文の中で、知らない文法はどのぐらいありますか。」の回答は、表4に示す通りである。

表4 質問 A-3. 回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
①ほとんどない	3	2 (1)	1 (1)	1	1 (1)	8 (3)
② 2, 3 個	1	—	2 (1)	—	—	3 (1)
③ 4~8 個	—	2	1 (1)	—	—	3 (1)
④半分ぐらい	—	—	—	—	—	0
⑤半分以上	—	—	—	—	—	0

4.1 節で述べたように、5 レベルの学生にとって例文中に知らない文法があるのではないかと考えていたが、回答結果によると、全員が①~③を選択しており、漢字や語彙よりも負担が少ないことがわかった。

最後に、「質問 A-4. 1つの課の「よみましょう」「かきましょう」の中で意味がわからない文はどのぐらいありますか。」の回答については、表5の通りである。

この質問については、①を選択した学生が最も多く、質問 A-3. とほぼ同様の結果となった。多少曖昧な漢字や語彙があっても、文脈から例文の意味は読み取れるということのようだ。

5.2.2 「B. 授業に関する質問」の結果

次に、「B. 授業に関する質問」の回答について述べる。「B-1. 授業の中で大変に感じること」は、項目①~⑤について、「全く大変ではない」「あまり大変ではない」「どちらでもない」「少し大変だ」「とても大変だ」の5

表5 質問 A-4. 回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
①ほとんどない	3	2 (1)	2 (1)	1	—	8 (2)
②2, 3 個	1	—	1 (1)	—	1 (1)	3 (2)
③4~8 個	—	1	1 (1)	—	—	2 (1)
④半分ぐらい	—	1	—	—	—	1
⑤半分以上	—	—	—	—	—	

つの選択肢中から最も近いもの選択してもらった。

項目①「新しい漢字の書き方を覚えること」の回答は表6の通りである。

表6 質問 B-1 項目①の回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
全く大変ではない	—	1 (1)	2 (1)	1	1 (1)	5 (3)
あまり大変ではない	1	1	1 (1)	—	—	3 (1)
どちらでもない	—	1	—	—	—	1
少し大変だ	3	1	1 (1)	—	—	5 (1)
とても大変だ	—	—	—	—	—	0

この項目では、5レベルと6レベル以上の学生との間で少し差が生じている。質問 A-1. 「1つの課の漢字の中で初めて習う漢字はどのぐらいありますか。」の回答について、5レベルの学生の中には漢字学習に負担を感じている学生がいるようだと言ったが、それを示す結果になった。

項目②「新しいことばを覚えること」の回答は表7の通りである。

項目②は、項目①に近い結果となった。質問 A-2. 「1つの課の「よみましょう」「かきましよう」の文の中で、知らない言葉はどのぐらいありますか

表7 質問 B-1 項目②の回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
全く大変ではない	—	—	2 (1)	1	1 (1)	4 (2)
あまり大変ではない	1	2 (1)	1 (1)	—	—	4 (2)
どちらでもない	—	—	1 (1)	—	—	1 (1)
少し大変だ	3	2	—	—	—	5
とても大変だ	—	—	—	—	—	0

か。」では、2, 3 語と回答する学生が多かったが、そのような語彙に絞って覚えていけば、あまり負担にはならないようだ。

項目③「「よみましょう」「かきましょう」を読むこと」の回答は表8の通りである。

表8 質問 B-1 項目③の回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
全く大変ではない	1	—	2 (2)	1	1 (1)	5 (3)
あまり大変ではない	2	2 (1)	1	—	—	5 (1)
どちらでもない	1	1	—	—	—	2
少し大変だ	—	1	1 (1)	—	—	2 (1)
とても大変だ	—	—	—	—	—	0

項目③は、項目①②に比べると、「大変ではない」を選択した学生が多い。学期開始当初、教科書の例文の理解が難しい学生がいるのではないかと考えたが、基本的には平易な文法で構成される文が多いため、漢字や語彙の習得に大変さを感じている 5A レベルの学生でも、例文の理解はやさしいと感じたようだ。

項目④「助詞など、ことばの使い方を覚えること」の回答は表9の通りである。

表9 質問 B-1 項目④の回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
全く大変ではない	1	—	—	1	—	2
あまり大変ではない		2 (1)	1 (1)	—	1 (1)	4 (3)
どちらでもない	3	—	1 (1)	—	—	4 (1)
少し大変だ	—	2	2 (1)	—	—	4 (1)
とても大変だ	—	—	—	—	—	0

項目④は、小テストに助詞を問う問題を入れたことで漢字の読み書きを覚えるだけでなく、当該語彙の使い方も一緒に覚える必要が生じるため、その点について学生がどう感じているかを知るために設定した。項目①～③に比べると、「全く大変ではない」を選択した学生が少なく、6レベルの学生でも「少し大変だ」を選択した学生がいる。漢字の読み書き自体は問題がなくとも、使い方については少し自信がないと感じている学生が多いのかもしれない。

「B-2. 授業での目的」については、①新しい漢字を習う、②語彙を増やす、③既習の漢字を復習する、④その他、から目的に近いものを選択してもらった。複数回答を可としたため、2つ以上を選択する学生が多かった。結果は表10の通りである。なお、④その他は、該当者のみ記入してもらう形式にしたため、表10には記載していない。

回答によると、すべての学生が②語彙を増やす、を選択している。また、5レベルの学生では①新しい漢字を習う、を選択する学生が多いのに対し、6レベル以上では、1名しかいない。したがって、5レベルの学生

表 10 質問 B-2 回答結果

	5A	5B	6A	6B	7	計
①新しい漢字を習う	3	2 (1)	1	0	0	6 (1)
②語彙を増やす	4	4 (1)	4 (3)	1	1 (1)	14 (5)
③既習の漢字を復習する	3	2	2 (1)	1	0	8 (1)

は、新しい漢字を習いつつ語彙を増やすことを目的としているのに対し、6 レベル以上の学生では、主に語彙を増やすことを目的として授業に臨んでいることが分かった。④その他、に回答を記入したのは漢字圏の学生 2 名のみで、その内容は「漢字語彙の発音を知るため (5B レベル)」と「出身国の漢字と日本の漢字の違いを勉強するため (6A レベル)」というものであった。

5.3 アンケート結果のまとめ

学期開始当初は、毎回の学習量が学生の負担になるのではないかという心配があったが、実際には大半の学生にとって授業で初めて習う漢字は多くなく、学生は既習の漢字語彙について使い方を確認したり、その漢字を使用した語彙を増やしたりすることを授業の主な目的としていることがわかった。その点では、語彙の適切な使い方を説明することや、語彙を増やすことに重点を置いた授業の構成は、今学期の学生の目的におおむね適ったものであったと言える。また、学生の学習段階や漢字圏か否かによるレベルの差も学期開始時に心配したほどではなく、どちらかと言えば個人差の方が大きいように思われた。この点については、学習に困難を感じていそうな学生に対して個別にサポートをすることが大切だと感じた。

6. 終わりに

本稿では、筆者が 2022 年度秋学期に担当した「表記法 6」の授業運営、

および履修者に対するアンケートの結果を報告した。中級の表記法を担当するのは初めてであったため、どこに重点を置いて授業を進めるべきか迷う点も多く、学期開始当初は手探りで授業を進める部分があった。今回、学生にアンケートを行ったことによって学生の受け止め方やニーズがわかり、授業の構成や進め方について振り返り、改めて検討する良い機会となった。もちろん、学期によって履修者は変わるため、この結果は今学期だけのものであるが、この経験を今後の授業運営に役立てていきたいと思う。

使用教科書

『留学生のための漢字の教科書中級 700 [改訂版]』（2017）佐藤尚子・佐々木仁子著、国書刊行会
『中級日本語 新装改訂版（上）』（2015）東京外国語大学留学生日本語教育センター、凡人社